

～犯罪被害者とその家族の人権～

～交通事故被害者遺族～

「背負っているのは悲しみじゃなく それだけの大きな愛なんだよ。」

長女の方が交通事故で亡くなったのは高校1年生の時でした。Hさんは、この事故のつらい思いから、悲惨な事故の起きない社会を実現したいと、多くの場所で交通安全に関する講演を行っています。そして今もなお「一緒に生きる」ことを原点として活動を続けています。

○事故はいつ起こったのでしょうか。

2007年10月、当時高校1年生だった長女は、自転車で高校からの帰り道、後ろから来た脇見運転の車にノーブレーキではねられ、病院では脳挫傷との診断で、意識不明のまま2日後に亡くなりました。

○ご家族や友人たちの悲しみは大きかったですよね。

「娘を見送ったこんな人生、私たちの何がいけなかったのか、私たちにどうしろというのか、なぜ逢えなくなってしまったのか」理由を探して彷徨い、自分自身の存在が許せず、消えてなくなりたいという思いが強くありました。妻もその日から家にいることが苦痛となり、一人で家にいることができなくなりました。事故の日、長女の帰りがいつもより遅くなったので「一緒に帰ろうか」と声をかけてくれた同級生も「自分が一緒に帰っていれば・・・」と苦しんでいました。病院・通夜・葬儀と多くの友人が来てくれました。事故後、それまでの楽しいことが全て悲しみにつながりました。おいしいものを食べたら「長女と一緒に食べたい」、買い物に行ったら「長女に買ってあげたい」と思い、自分たちが楽しむことは悪行のように思っていました。

○交通事故被害者のご遺族として思うことはどういうことでしょうか。

最近のテレビ報道を見ても、また各地で私たちのような被害者が生まれていることに心が痛みます。平凡な生活がどんなに幸せだったか、今更ながら痛感します。大切な事はなぜ失わないと気づかないのでしょうか。笑顔、思いやり、そして、こんなに大切な命。私は当初、何もわからずに、インターネットの中で、同じく子どもを失った方々とのやり取りで情報を集めていました。これからは、犯罪被害者等支援条例の制定や被害者支援の啓蒙的活動を通して、地域で支援できる社会になってほしいと思います。

○事故後に様々なことばをかけられたと聞きましたが。

事故の状況を知りたいと訪れた警察署で「何が聞きたいんですか」、検察官からは今回の事故は過失であると言う説明を受けるのに「あなたもうっかりするでしょう」、弁護士からは「加害者も社会的な罰を受けています」など、法に関わる職種の方々の言葉は冷たいものでした。また、よかれと思ってかけてくる「早く元気になってね」「もう落ち着かれましたか」など、安易な慰めの言葉にさらに傷つけられた時期もありました。しかし、彷徨っていた時、同じく子どもを亡くされたお母さんから、「背負っているのは悲しみじゃなく、それだけ大きな愛なんだよ。」という言葉いただき、初めて今の自分でいいんだと思えました。「言葉は毛布であり、言葉はナイフである」と感じました。

○今、どのような活動をされていますか。

お別れから6ヶ月経った月命日、長女のことを何一つ失いたくない一心で「15歳のメッセンジャーN(長女)」のホームページを発信しました。これが私の1番目の目標でした。あれから何かに導かれるように生命のメッセージ展に参加することとなりました。長女は一足先にここに就職したと思っています。長女の仕事は命の大切さを伝えていくことです。その後、長女の母校で講演したことを皮切りにすでに50カ所以上で交通安全に関する講演を行っています。

「生命のメッセージ展」とは

犯罪・悪質な交通事故・いじめ・医療過誤・飲み会での飲酒の強要などの結果、理不尽に生命を奪われた犠牲者の遺品や等身大の人型等を展示し、多くの人に命の重さについてメッセージを発信しています。

○社会に伝えたいこと、してほしいこと。

一つは、悲惨な事故が起きない社会の到来です。どんなに注意していても交通事故被害者になることはありますが、加害者になることは、十分注意を払い安全運転をすることで避けられると思います。そして人為的ミスをかばう機能を備えた車の普及も大切であると感じます。もう一つは、被害者支援が浸透した社会の到来です。もしもあなたが被害者になった時、あなたが支援を知らなくても、あなたの周りの人たちが「こんな支援があるよ。」って教えてもらえる社会になったらいいなと思います。